

法眼

第10号 2002年5月

仏教と平和 (仏教NGO、シャンティ国際ボランティア会の立場から)

松永然道

シャンティ国際ボランティア会会長

21世紀こそ戦争のない時代にしたいとの願いも空しく9.11のニューヨークに於いて起こされたテロ事件は、今世紀初頭の世界中を震撼とさせた。半年を経た今、この事件を考えると愚かな人間史上の一事件となってしまふのかもしれない。世紀と言う時間の観念は、人間社会の日本を含む一西歐文化圏内(全てではないが)だけで使われている時間の概念である。この愚行が世紀初頭であろうがなかろうが、この地球上で人類も含めてあらゆる生物が種の存続の為に殺し合いを続けてきた。此の俣では、その歴史の単なる一過程に過ぎない事になってしまう。近世における人間同士の殺し合いは、政治経済の欲望から発した殺し合いである。理知を持った人間としてこの悪循環を止めたいと言う全人類共通の願は実現させなければならない。この壊れ易い地球は何時かは終焉を迎えなければならないのだから。

平和な都市に突然起こった蛮行は「戦争だ!」と言わしめるもの当然かもしれないが、この事件を惹起せざるを得なかった何らかの原因があったのであろう。しかし、現実には3000人以上の尊い生命が一瞬のうちに奪われた事には形容しがたい憤りを覚える。犠牲者に対して限りない哀悼の意を捧げる。SVAは過去何度か共に救援活動を行ったペンシルバニア州に本部を持つ同じNGO、AFSを通して僅かばかりではある支援とお悔みのメッセージを贈らせて頂いた。テロにしろ戦争であるにしろ殺戮である事には変わらない、どんな理由があるにしても殺戮は犯罪以外の何物でもない。

平和は?

日本は50年以上、戦争の当事国になっていない、平和惚けしているときえ云われる程に平和を享受しているかにみえる。平和の反対が戦争であるならば、確かに日本は平和といえるであろう。しかし、戦争をしていない国の市民誰もが平和を感じ

ているかどうかは別である。人間だれしも身の安全と将来への明るい希望を持たた時のみ平和を感じることができる。

しかし戦争が無ければ身の安全が得られるとは言えなくなった。特にこの度のテロは文明の最先端で、世界最強の軍事力を誇る国のど真ん中で起こった。また、その報復攻撃は普通の常識の範囲を越える未知に近い場所に加えられた。世界中どこにも人に知られずに隠れ住むところはないと知らされた。

私は第二次世界大戦を小学校低学年時に味わったとは云えその恐ろしさは殆ど忘れて、日本が平和な国、戦争放棄した民主主義の国、また地球上何処も同じく平和と安全を保障されているかのように思い込んできた。しかし、1989年カンボジア難民救援活動に参加するように誘われてこの20年、遅まきながらこの地球社会は我々人間には、どうにも解決できない矛盾を抱えた生物である事を知り、苛立ちに似た思いを抱いている。カンボジアでは人口750万のうち200万人が、ただ少し知識を持っているというだけの理由で権力者集団に虐殺されたり強制移住させられ、過酷な強制労働と栄養失調の為に死に至らしめられた。

カンボジアの隣の国ラオスには山岳民族と呼ばれる、少数民族が多く居る。その人達は固有な伝統文化を持ち自然と共に平穏な暮らしをしてきた。民族意識はあるが国家意識は持たない。従って国境などはどこにもない。そういう民族に対して人口のより多い低地ラオと呼ばれる民族はラオスと呼ばれる国家を作っている。当然そこには生存競争に似た争いが起こり少数民族は同化される対象となり、差別され、生活権がおびやかされ難民となる。同じような事がミャンマー、中国その他アジアには多く見られる。また、アフリカやこの度のテロ報復爆撃の対象となったアフガニスタンや中近東、南米大陸その他にも多くの少数民族が居る。それぞれが言語、生活習慣等伝統文化と民族の誇りを持って生きてきた。そこに武力を持って、己の経済的、政治的の覇権を得たい欲望の為に、弱者を殺し、駆逐し、もしくは従属せしめる愚行をしてきたのが、人間と言う動物ではなかったのか。まさにカンボジア難民の救済活動に携わってその事実を見聞きした。

人間の飽くなき欲望は、確かに人類の生活文化を発展させ

たと言えるかもしれないが、その為に失った物も大きかったと言える。この愚行によって世界が滅亡するところまで来ていると言われる。科学の発達によって大量破壊兵器、更には人間及び動植物の生命までコントロール出来るのが現代である。文明の発達是我々人間には簡単には平和ををもたらさない。だとするならば、平和は私達が、みずから作り出す以外にないのではないか。しかし出来ない。毎年世界の宗教者が集まり平和の為に祈り、瞑想し、行進し、シンポジウムを開き、討議を重ねる。それでも争いは無くならず、地球環境は年々荒れて行き、温暖化も進んでいる。原始の昔にかえる事は出来ない、今人間がしなければならぬ事は何なのか。結論は出ていない。

SVAは！

平成12年（2000年）元曹洞宗国際ボランティア会は創立20周年にして、念願の社団化を果たす事が出来た。名前も社団法人シャンティ国際ボランティア会（略称SVA）と改め、東南アジアを中心として恵まれない子供たちに教育の機会を与える為の活動を続けている。しかし、日本のどのNGOも抱えている慢性的資金難と人材不足に悩まされている。特に最近の日本経済の不況が大きく響いている事は否めない。これまで海外に活動の現場を持つ日本のNGOはすくなくあった。そのためSVAに向けられる注目と期待は必要以上に大きなものとなり、その結果、難民支援、教育文化支援、農村開発、緊急支援と活動が広がってしまった。しかしSVAの現状を鑑み、本来の活動である子供を中心とした社会の弱者に眼を向け、対象国の教育、文化を大切にすべくNGOとならねばならないと考える。

元々SVAは仏教国であるカンボジアの難民を助けようとして曹洞宗が組織した任意団体であり、海外で難民支援を行う術も、資金もない団体であった。他の仏教宗派も同じ様に昭和54年（1979年）インドシナ難民発生時、募金活動をはじめたが、集めた募金はUNHCR、日本赤十字社、マスコミ関係の各社に寄付するのみであった。日本人はお金を出せばそれで解決すると考えているのか、日本の仏教徒はアジアの人達の痛みを分かち合う心がないのか、との国際世論の批判を浴びた。この痛烈な批判は仏教会に大きな衝撃を与えた。その為曹洞宗は現地にボランティアを送り込んだが、欧米諸国の先進NGOの活動の彼我に愕然とするのみであった。

カンボジア難民ホールディング・センターに収容された人達は、強制労働と栄養失調、戦乱の地雷原を逃れ、ほとんどが家族を失い、怪我を負い、ようようにしてタイの国境を越

えてたどり着いた。国境周辺には十個所以上の難民ホールディング・センターがあり国境を越えられない者を含めて100万人以上が押し寄せていた。

偶々、その国境で逃れてくるカンボジア人をセンターに迎え入れる為に、カンボジアの高僧マハー・コーサナンダ師がいた。師は戦乱が始まった為に南タイの布教地から自分の寺に帰ることが出来ずにタイに留まって居た。避難民が国境に集まっていると知り危険を冒して救援に駆けつけた。避難民の多くは女性、年寄り、子供たちである。ほとんどが自分の足で迎えるトラックに上る力もない人達を、瘦せたコーサナンダ師は汗だくになって押上げていた。それを見た欧米の記者が上座部の僧としてあるまじき行いと非難した。師は「もしここに仏陀が居たら私と同じ事をするであろう」と答えたという。

我々SVAが活動の為にいった最初のセンターは国境より40キロほど西にある、サケオ・キャンプであった。収容された難民は7万人以上居た。センターとは名ばかり、1メートル前後の竹の棒に支えられた青いビニール・シートの屋根の下、地面に重なり合うぼろ布の様に横たわっていた。下水道が掘られていたが水が所々に溜まり黒緑の泥になって強い太陽に照らされ、一日中キャンプの外れで死体を焼く煙りが絶えなかった。それでも子供達の声が聞こえた。其処だけが人間が生きて居ると知らせる声であった。

子供たちが居るところは、センターの中でありながら其処だけ、何か違う想いがした。殆ど裸同然の子供たち、瘦せこけ煤けた身体なのにその眼は、周りの情景と違った光を放っている様に見えた。今まで見て来た恐怖や、親しい者を失った苦しみ、飢餓にも曇らされない眼であった。この子供たちへ何か私達にも出来る事があると感じた。遊びの中でクレヨンと画用紙を持ち出し絵を描いてもらった。しかし、子供たちが描く絵は銃と戦車であり、戦争の絵ばかりであった。中には自分の父親がポルポト兵に殺されている絵、兄弟が血を流して倒れているものばかりであった。それらの光景が子供達の心の奥深く沈んでいる事を知らされた。

SVAの活動は、子供たちが心から笑える事が出来るようにしてやりたい、この思いが原点で始まった。それは学校や教育の環境を作る事、図書館を造り図鑑を揃える事などであった。カンボジアの伝統文化も習う場所を整えた。それ以来SVAの専門は教育分野となった。

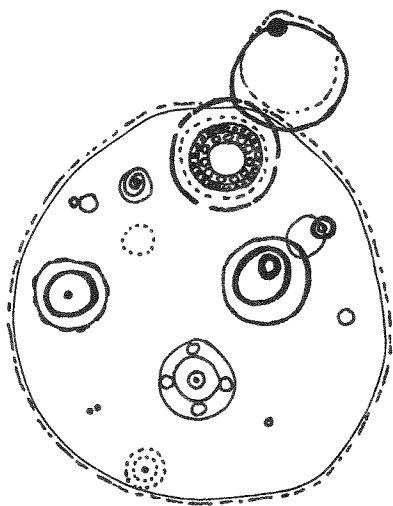
市民の平和を守る事は国の問題であり、責任である。しかし、必ずしもそれが出来ないのがこの地球世界の国々である。

カンボジアの悲劇から我々が教えられた事は自分達が先ず学ぶ事、そして悲しみを分かち合い共に生きる事を考える事であった。今私達は「共に学び、共に生きる」をSVAのモットーとしている。これは仏教の説く「縁起の教え」である。そしてSVAの活動を続けさせて来たものは、大勢の支援者による無償の浄財である。それが子供たちに届き、元気な声が出て、その声に家族が励まされカンボジアの国と人々が立ち直る事ができるなら、ここにも「三輪空寂の教え」が成就する。

20年も続いた戦乱は、難民の人達が自分達の国に帰る事が出来、反乱分子が解散して平穏になったといえども、まだ傷痕は完治していない。

アフガンでは問題が始まったばかりである。何時までSVAが活動を継続出来るか分からないがこの地球が存在する限り戦乱や争い、自然災害、人権問題、環境問題と次々と起こってくると思われる。SVAの正式名称はシャンティ国際ボランティア会であり、シャンティ(Shanthi=寂靜、平和、涅槃の意)は東南アジアでは普通名詞の「平和」として用いられている。名前のように私たちは、平和の世界成就に向って永遠の努力を続けたいと願っている。

(シャンティ=涅槃、寂靜shanthi [santa巴利]、東南アジア仏教圏では平和の意のとして用いている普通名詞)



なにを為すべきか

法山・アラン・スナキー

パークレー・禅センター

2002年 一月～二月

「なにを為すべきか」—これは1902年に出版された、レーニンが革命運動の展開について論じた有名な書物の表題である(わたしはずいぶん昔にこの本を勉強したことがある)。実はパーリ語経典のなかでもブッダが弟子を革命的ともいえる悟りの境地に導いたときにこれと同様なことばがしばしば使われているのだ。「為すべきことはすでに為された!」と。そして現在、つまり九月十一日の同時多発テロ、炭疽菌の汚染騒ぎ、アフガニスタン空爆、タリバーンの崩壊、そしてアメリカに対する終わりのない敵意の拡大。こうした出来事が起こってからすでに何ヶ月も経った後のいまなお、われわれの多くは「なにを為すべきか」と依然として問い続けている。

まかれた種は適当な条件が整うと芽を出しはじめる。これは善悪、正邪を超えた厳粛な事実である。われわれはサムサーラ(輪廻あるいは生死)、つまり条件次第でかならず変化する世界の内に生きている。禅の修行においては「生死と涅槃は別々のものではない(生死即涅槃)」ことをここにしっかりと銘記しておくように努めなくてはならない。そのことを忘れないようにし、さらにそれをほんとうに悟ること、それこそが禅の要求する困難な課題なのである。わたしはこれから自分の考えを述べていくのだが、それはあくまでもまだ形をとりつつある途上の考えでありいまだ暫定的なものなのである。だからそれをこうして書くことに正直ためらいを感じてもいる。釈尊は「正見」とはあらゆる見解への執着をなくすことであると教えている。それは歩むべき道であると同時に目的地でもある。いずれにしても、わたしはいまなおその長い道のりの上にいる。

これまでの数ヶ月間に次々と起こった出来事がわたしの夢の中に何度も現われてくるようになった。世界貿易センターとペンタゴンに起こった事件の映像はわたしの心のなかに鮮明に刻みつけられてしまった。自分の頭の上を飛んでいくジェット機がわたしのところにその映像を真新しくはっきりと呼び覚ましてしまう。タリバーンは戦争に負けた。しかし、アフガニスタンへの空爆はタリバーンの犠牲者でもあった世界で最も貧困に苦しんでいる人々の中にさらなる難民と犠牲者を増やすことになった。アメリカ合衆国が主導して行った

軍事的争いによってアフガニスタンとその近隣諸国の政情はきわめて不安定になった。それはとうていありそうにもないとはいえ、核戦争が勃発するかもしれないという現実的な危険性をはらんでいる。わたしは、こうした状況を悲嘆するあまり自分がどこにも動けずその場に釘づけされているような気持ちになることがある。しかしそれでもなおわれわれは道の上を前に向かって進み続けなければならないのだ。では、どうすればいいのだろうか？

そのことに関してたいへん有益だと思われるいくつかの原則あるいは実践がある。それはゼン・ピースメイカー・オーダー（禅調停者教団）とピースメイカー・コミュニティ（調停者共同体）から学んだものである。彼らの説く三つの信条とは次のようなものである。

1. 自分はすでにもうわかっていると決め込まないこと。
自分や宇宙についての固定的な考えを放棄すること
2. 世界の喜びと苦しみを見とどける証人となること
3. 自分と他者をいやすこと

「もうすでにわかっていると決め込まないこと」はわれわれにとって深い課題となる。それは正しさと恐怖について自分もっている固定観念を手放し、できあいの答を持たないことをいとわないということの意味するからだ。そのためには辛抱強い忍耐が要求される。同時に、「もうすでにわかっていると決め込まないこと」はすべての見解—ジョージ・ブッシュの見解、オサマ・ビン・ラディンの見解、ダライ・ラマの見解、ジェリー・ファルウェルの見解、隣人の見解、禅堂で自分の隣に坐っている人の見解、そして自分自身の見解—をどれも同等なものとしてきちんと認めることをも要求している。それぞれの人間の考えは（それにどうしても反発を感じることもあるにしても）原因と条件の世界に生きる生のありようをそれなりに十全に表現したものであるからだ。われわれのなかにはそれぞれの見解を体現し得る潜在力が秘められているのだ。

二番目の信条である、「見とどける証人となる」ということは存在するものすべてとの親密な関係において自分自身を見ることが関わっている。この関係はわれわれにおのずと畏敬の念を起こさせるような崇高なものである。だから、この親密な関係に対して正しい応答をするためには、静かに坐って完全に受容的な状態にならなければならない。静かに坐って注意深くあること、これはすなわち坐禅である。「証人となる」ことの一つの意味は自分が見ること、あるいは聞くことを耐え忍ばなくてはならないということだ。観世音菩薩

とは世の人々が苦しみ叫ぶ声を聞く者のことである。われわれはそういう観世音菩薩のようであろうと努力する。だからわれわれは苦しみと喜びが現われる現実の世界やわれわれ自身の身心のなかのさまざまな場所へと足を運ぶのだ。そして、そこで起きていることの原因（因）と条件（縁）をできる限り見て、それを学ぼうとするのである。おたがいが共有するアイデンティティにじかに触れるために、すべての他者とわかちあう関係をもとうと努力するのである。

「証人となる」ことは生きとし生けるものすべての苦しみについて学び、われわれ自身のなかにその苦しみを見出すことでもある。それは「すでにわかっていると決め込まないこと」といっしょになって進展していく。世界貿易センターが崩れ落ち何千人もの人々がそこで死んでいくありさまをはっきりと見とどける証人となる。タリバーンによる抑圧のもとで苦しんでいるアフガンの女性たちの苦しみ、そしてタリバーン達自身の苦しみを見とどける証人となる。歩道の割れ目からたくましく生えてくる草のように、われわれ自身のうちにいつまでもあり続ける単純な喜びを見とどける証人となるのだ。

「証人となる」ということがさらに意味することは、われわれが見とどけたことを他者へ伝えること、人々がわれわれのような人生の見方をするよう手助けすること、そして彼らもものを見るような仕方でもわれわれもものを見ようとするのである。われわれは他の信仰をもつ人々との間につながりをつくっていく機会をもつことができる。たとえば、近所にあるモスク（イスラム教寺院）や寺をたずねること、われわれの多くが享受しているような富やハイテク機械のない国々の生活がいかなるものであるかに目を開くといったことである。証人となる責任は現実をありのままに見るということから生まれてくるのだ。

三番目の信条は「自分と他者をいやす」ということだ。これら三つの信条と実践はけっして1, 2, 3という順番で直線的に進展していくのではない。それぞれが他のふたつとたえず連携をとりながら進んでいくのである。いやしは内側から外側へと進み、そして内側へとふたたびもどっていく。いやしは坐禅堂でこころのなかに沸きあがってくる思いや感情を見つめながらじっと坐っているときに起こる。いやしは友人や共同体が自分たちの体験していることを自由に語り合えるような仲間どうしのつながりを創っていくことである。いやしは政治的指導者たちにむけて請願の手紙をかくこと、沈黙の徹夜禱やデモを組織したりそれに参加したりすることで

ある。クエーカー教徒達はこういう活動を「権力に向かって真実を語る」と呼んでいる。

ブッダの平和についての教えはわれわれが実現しようとしている真理でもある。ダンマパダ(『法句経』)第5詩においてブッダは次のように語っている。「この世において憎悪(敵意)が憎悪によって鎮まることは決してない。憎悪は憎悪ではないものによってのみ鎮まる。これは永遠に変わらぬ法である」と。テロリズム、爆弾による暴力、飢餓という構造的暴力はさらなる暴力を産むだけだ。われわれ自身のなかのうちに暴力、われわれの社会のなかに存する暴力をなくすことがいやしへの道となるのだ。断固たるものではあるが同時に人に対して寛大でもあるような態度をとることができるだろうか？生半可であいまいな八方美人的態度におちいらぬで、自分たち自身を含む苦しむ人々すべてを勘定に入れたヴィジヨンとことばをもつことができるだろうか？ティク・ナット・ハン師は次のように書いている。「自分たちが生き延びたいと望むなら相手方が生き延びるために働かなければならない。これはとても単純な道理だ。生き延びるといのは人類の一部だけではなくそれが全体として生き延びることなのだから」と。誠意をもってしかも恐れることなく仲間、敵、そして自分自身とかわりあうとき、われわれは平和の実現のためにあえて危険を冒しているのだ。そのとき、自分が生き生きと生きていることを実感するだろう。

道元の『現成公案』は次のような有名な則で終わっている。

寶徹禪師が扇を使っていた。そこへある僧がやってきて質問した。「先生、風の本性は常住であり風がいきわたらないところはどこにもありません。それならなぜあなたはどのように扇をあおいでいるのですか？」禪師は答えた。「おまえは風の本性が常住だということは知っているが、それがどこにでもいきわたるといふことの意味がわかってはいないようだ」と。そこでその僧は再び質問した。「では、風がどこにでもいきわたるといふのはどういう意味なのですか？」師はただ扇をあおぐだけだった。僧は深く師を拝した。

なにが為されなければならないのか？生きとし生けるものはすべて、例外なく、ブッダである。たしかにそうであるけれども、依然として、われわれはそれを現に実証しなければならないのだ。扇を実際にあおぐことは必要な実践であり、それは風の本性を実現するために努力することなのである。扇をあおぐことによって仏性の風は休むことなく流れめぐり続けていく。そのことによってはじめてすべての人々—アメリカ人、アフガン人、イスラエル人、パレスチナ人、インド

人、パキスタン人など—のうえに、信仰・文化・民族・階級・性別に関わりなく、もともととうちにあった証りが顕現するのだ。われわれのなすべき仕事は扇をあおぎ続けることなのだ。そうした努力、実践によってこそ、苦しみという荒野のなかに変革の風が起り、それがあらゆるところにいきわたっていくようになるのだ。



世界貿易センタービル崩壊の教訓 -2001年9月16日におこなわれた講話-

円教オハラ

ビレッジ禅堂、道得寺

ここからほんの数ブロックのところでは未曾有の破壊と苦しみを引き起こしたテロ攻撃事件から五日が経ちました。わたしたちの禅堂はその場所からとても近いところにあったので昨日までこの建物に入ることはできませんでした。そのあいだ、わたしたちはワシントン・スクエア・パークとわたしの家で坐禅を行じまた人々の語ることに耳を傾けいっただいということが起こったのかをしっかりとみとどける修行をしました。けさ、こんなにたくさんの人たちと一緒にこうして禅堂にもどることができたのはほんとうにすばらしいことです。こういう困難な状況にいるときにはなおさら、スピリチュアルな修行が自分達をどれほど支えてくれているか、あらためて実感させられます。わたしたちの場合、その修行はこの世にはほんとうに頼りになるものはひとつもないということを教えてくれます。ですがその修行は、なにが正しくなにか間違っているかを一方的に教えてくれるものではありませんし、なにを愛しなにを憎むべきかをわれわれに指示するものでもないのです。

わたしたちのおこなっている修行は偉大な勇気・勇敢さをもつようにとわれわれに命じます。すなわち、われわれがどう行動すべきか、周囲の出来事に対してどう応答すべきかを一方的に指図するようなひと組みの決まり、考え方（先入見）をもつことなく、刻々の瞬間に新鮮に参加すること、刻々の瞬間にそのつど正しく行動する勇敢さを持つようにわれわれをしむけるのです。こういう伝統にしたがって修行するということ、苦しみ・怒り・恐れに直接対峙するということはたいへん大胆で勇気のある行為です。

キサーゴータミーのはなしを思い出してください。彼女は死んだ自分の赤ん坊を抱いて泣き叫び取り乱しながら釈尊のもとに走ってきました。そして釈尊にどうか息子を生きかえらせる薬をくださいと懇願しました。釈尊は「わたしはそういう薬のことを知っている。しかしあなたは自分自身の力でその薬を見つけなければならぬ」といいました。そして、彼女に死人をひとりも出していない家から一握りのカラシ種をもって来るようにと命じました。彼女は最初の家へいきま



した。するとその家の人は「よし、カラシ種を持ってきてあげよう。いや、ああ、駄目だ。去年、おじいさんが亡くなったから、カラシ種はあげられません」といいました。あなたたちにも想像ができるでしょう、キサーゴータミーは死人を出したことがない家からカラシ種をもらおうと村の家々を一軒残らず回ったのですが、どの家にもそこでは誰かが死んだと告げられたのです。こうしてたいへんゆっくりとですが、仏教の知恵が彼女のなかにしみ込みはじめたのです。とうとう、彼女は死んだ赤ん坊を抱いたまま釈尊のもとに帰ってきました。そしてこういったのです。「あなたのカラシ種の教えは成就しました。すべての人々は死と苦しみに直面していることがはっきりとわかりました」と。

わたしたちはこの町で殺された人々、そして彼らがかつて愛した残された人々のことを思って深く悲しみます。また世界各地でいままさに死につつある人々のことを思って深く悲しみます。アフリカでエイズのために死にかかっている人たち、貧困にあえぐ地で餓え死にしつつある人たちのことに思いをはせ深く悲しみます。きょう、この瞬間にも、栄養不良のために死につつある赤ん坊たち、暴力と貪りに深く傷つけられている幼い子供たちがたくさんいます。わたしたちはそのことにも気づいていなければなりません。そして、わたしたちがこうしてそのうえに坐っているこの大地もまた土、空気、水を不当に搾取されて苦しんでいること忘れてはならないのです。

カラシ種の教えはこの世界でたえず起こっている死と苦しみのことをわたしたちに思い出させてくれます。人生のこういう真実相に触れないですむ人はどこにもいません。釈尊は別なお経のなかで、人は三つの異なったしかたで菩提心、つまり悟りへとむかうところに達すると言っています。第一のグループは隣村で起こった悲しい出来事を耳にして生きる苦

しみと死についての真実を悟り、目覚めたところを培う道を成就しようという誓願をたてる人々です。しかしそういう人は非常に少数です。たいていの人々は自分の村の誰かが苦しんでいると知ったときにはじめてそういうことを悟るのです。われわれはこの後者の部類に属しています。ニューヨーク・シティはわたしたちの村です。この村の多くの人たちが苦しみ死んだということを知ることによって菩提心を起こすことができるのです。そして、みずからのうちにある真実を求めることによって、自分自身の苦しみと他の人々の苦しみをなくさなければならないとはっきり実感するのです。そして三番目のグループはもっとも頭の固い人たちが苦しみが彼ら自身の身に降りかかるまで待たなくてはなりません。他人に起こる病いや死を背負うのが彼ら自身のことがらになるまで待たなくてはなりません。彼らはそのときになってはじめて本当に「道」に気づくのです。

しかし、道を見ていればそれで充分であり道を実現するかどうかということは二の次なのでしょうか？自分、あるいは愛する人が病いの診断を受けたらそれで充分であってそれを治療するかどうかは二の次でいいのでしょうか？このたびの悲劇で亡くなった多くの人たちの名前を法要のときに読み上げたのだからそれで充分であり、道をきょう成就するかどうかは重要ではないのでしょうか？くるしみがどこにでもあるということを悟ったのがホロコースト、ヒロシマ、ポーバルなどで起こった悲惨な出来事のことを聞いたときであったということは大事なことではないのでしょうか？

菩提心とはなんなのでしょう？わたしたちが起こす仏のころとはいったいなんなのでしょう？それはなんにもも排除しない般若、つまり偉大なる知恵の教えなのです。それはあらゆるもの—黒煙も青空も—をうちに含んでいます。今



回の事件で亡くなった人たちのリストのなかにテロ事件の犯人たちの名前が含まれていなかったことに気づいていますか？彼らもまた飛行機の墜落で死んだのではないですか？犯人たちの名前がリストにのせられていないのはなぜなのでしょう？このことはわたしたちのなかでどのような自動的な選別がはたらいっているかを示していないのでしょうか？維那が回向文を読み上げたとき、この出来事を引き起こした人々の名前と苦しみがそこに含まれていたことに気づきましたか？どんなこともどんなひとでも除外して無視することはできないからです。わたしたちはなにひとつ除外することはできないのです。

そしていま現在自分たちが感じている怒りや悲しみも除外することはできません。自分の感じている感情をきちんと認めなくてははいけないのです。それを認めないということは意識的経験からそれらの感情を切り離し、自分が認めることのできないものを体現している「あいづら」という観念をつくりだしてしまうからです。すなわち不正で邪悪で自分たちとは別の「彼ら」という観念です。これこそがまさしく世界にこのうえなくひどい苦しみを引き起こすのです。

もしかしたらこういうことは意味をなしていないかもしれませんが。しかし事実そうなのです。もちろんそれは意味をなさないので。でも、意味をなすというのはそもそもどうということなのでしょう？それはパラドクス（逆説）であり、現実（リアリティ）です。わたしたちは感情—恐れ・怒り・迷い—を経験する形あるもの（「色」）です。わたしたちは欲望・むさぼり・憎悪・敵意を経験します。しかし、そういったことのまわりに自分を固くこわばらせないかぎり（それらの感情をあたかも真実であるかのように大きく育てあげたり、それらが存在しないかのように感情を抑圧することで、わたしたちは自分を固くこわばらせてしまうのです）刻々に新鮮で自由でいることができるし、自然な反応のながれのなかでそれらの感情の存在をきちんと認め、そしてそれらを手放すことができるのです。感情のまわりに自分をこわばらせないことによって、そしてそれらの感情に名前や理論的根拠やイデオロギーを与えないことによって、「イズム」—たとえばナショナリズム、そう、それがたとえブディズムであつても—をつくりだすことをさし控えるのです。「イズム」はわたしたちにとって牢獄となるからです。

わたしたちはどこにもよって立つ場所をもたない、どこにもしがみつ場所がない「空」でもあります。その「どこにもしがみつ場所がないこと」こそがわたしたちの完全で徹



底した自由そのものなのです。あの火曜日にいのちを落とした人たちの名前を読み上げ、そして坐ります。するとわたしたちひとりひとりのなかにそれぞれ違ったことが浮かんできます。たとえば、激しい怒りが浮かんできたとしましょう。わたしはそれが現われてくる場所を見ます。しかしわたしはそれをただ見つめるだけです。するとそれは落ち去っていきます。こんどは恐れが現われます。わたしはそれをただ見つめるのです。するとそれもまた落ち去っていきます。もしかしたら何週間も去っていかないかもしれません。それでも、わたしは坐り続けなくてはならないこと、それを見つめ続けなくてはいけないことを知っています。それは最後には落ち去っていくからです。はっきりと目覚めており、気づきに満ちており、あたまのなかに浮かんでくるもの語りの筋を信じ込めないでいるならば、それはいつかかならず去っていくのです。だからこそわたしたちは坐るのです。

そのこと、つまり自分のおこなっている修行のちからを信頼してください。修行はわたしたちを変えてくれます。また、道元禅師が教えているように、たったひとりの坐禅でも世界を変えることができます。この部屋を見渡してみると、ここにいる二人に一人はなんらかのかたちでテロ事件後のヴォランティア活動にかかわってきました。食物を料理したり、給仕したり、痛む筋肉をさすってあげたり、恐怖におののく家族の話に耳をかたむけたり、手をとってあげたり、泣いたり、話したり、聞いたりしてきました。直接的にヴォランティアをしていない人も、どうか自分がなんの助けにもなっていないという一種の神経症的な物語りのなかに自分を落ち込ませないようにしてください。あなたはたしかになんらかの助けになってきたのだし、いまもなにかの助けになっているのですから。ただそこにいることによって、人の話に耳をかたむけること、通りに立つこと、それが立派に人の助けになっているのです。見ることのできない人の眼となって見るこ

と。憎悪や殺して復讐してやりたいという思いで心がいっぱいになった人の語ることをじっと聞くこと。なにが起こったのかをみとどける証人になること。つまり、人々の語ることに耳をかたむけること。刻々の自分の体験をみとどける証人となること。それが人を助けることになっているのです。

いま述べたようなこと—ほんとうの意味で人に奉仕すること—は菩薩の行いです。わたしたちは争い、欲し、固執するエゴを捨て去らなくてははいけません。しばらくエゴを捨て去り、耳にしたくないと思うことにじっと耳をすませるのです。人生から除外されるべきことはなにひとつないからです。なんであれ人生で起こることはわれわれの人生に他ならないのです。このたびの悲劇もまたわたしたちの人生なのです。わたしたちは現にここにいるのですから。それに関わったすべての人たちと相互につながりあっているのですから。わたしたちはこの事件に関与している一人一人にかかわりあい責任をおっているのです。その責任を引き受けることによってはじめて、事態を変えていくことができるのです。

すべてはつながりあっています。今回のような悲劇があります。自分自身の仏心があります。世界の苦しみという現実があります。怒りがあります。恐怖があります。こうしたことのすべては世界という一個の大きく明るい真珠の内部にあるのです。

すすと黒煙、亡くなった人たちに対して感じる締め付けられるような感情のただなかにその大きく明るい真珠を見いだすことができますか？この真珠から排除されるものはひとつもないのだとほんとうに悟ることができますか？わたしたちのなすべきことはできうるかぎり広々と開かれてあることだと悟ることができますか？できうるかぎりこころを開き、自分の感情や周りの人々が感じている感情を拒絶しないこと。かれらがそういう感情をもっているということを否定しないでください。かれらの感情をわれわれの人生という大きく尊くそして明るい真珠の一部として見てください。

アメリカの曹洞禅（5）

学校における禅

ジョン・マクレー

インディアナ大学

学校における禅はいまどうなっているのだろうか？わたしは個人的に話をかわすことができる人達からはさまざまに異なった情報が入ってくる。「学校における禅にいったいなにがおこっているのか」を明らかにするために、わたしは読者の皆さんからの助力をいただきたいと思っている。（後にわたしの電子メールアドレスを記すのでそこに情報をお寄せいただきたい）

これから書こうとしているのはいまの時点でのわたしの印象である。読んでいただければわかるように、そこには矛盾がある。わたしは書き進めながらいくつかの問いを出してみようと思っている。

かなりの数の曹洞禅指導者が大学で坐禅のクラスや集まりを持っている。しかし、こうした現在も進行中の彼らの努力にもかかわらず、クラスや会に集まる参加者や会員の数はたいして増加していないという話を耳にしている。つまり、学生はクラスに顔を出し、ほんのちょっと坐禅をし、ほんのちょっと話を聞けけれども、そのあとはそれぞれが自分のやりたいように各自のことをやりはじめそれっきり来なくなってしまうというのである。学生たちがその指導者の主宰するセンターやグループの積極的なメンバーとはなっていないのだ。わたしはそういう個人的印象をもっているのだが、はたしてそれは正確なものなのだろうか？また、大学ではなくハイスクールで、あるいはキャンパス外で中等学校の生徒を対象にした坐禅のクラスがもたれているようなケースがあるのだろうか？

現在は、五年前あるいは十年前に比べると、きわめて多数の十代後半から二十代の若者が、接心をふくむ曹洞禅の活動全般に参加しているようだ。かつては、「新しく禅に関心をもつようになった人達でさえもすでに年齢的には五十代、六十代といった年配ばかりだ」という話をよくしたものだ。かれらは長年にわたって禅のことについて耳にしてきたもののそれを実行するところまではいたらなかった人達だ。しかし、いまやこういう一般的な描写（それが当たっていたとしてだが）はもはや正しいものではなくなっている。どこ

へいっても数世代にわたる幅広い範囲の年齢層の人々が曹洞禅の活動に参加しているからだ。こうした過去についての、そして現在について一般的な描写はあなたの属しているセンターの実情に照らしてあてはまっているだろうか？

禅を学ぶ若い世代の人達はどこからやってくるのだろうか？昨年十一月、ポートランドで開かれた集まり（それはダルマ・レイン・禅センターとゼン・コミュニティ・オブ・オレゴンという二つのグループの合同の集まりであった）において、われわれ約二十五人の参加者は一人ずつ自分がどういう経緯で禅に関心をもつようになったかを話し合った。わたしはそのときメモをとっていなかったのだが、あとで澄禅・ベイズ師がわたしにこう言った。「多数のひとたち、おそらく参加者の半数は大学での仏教の授業がそもそも禅にこころざすきっかけの一部となったと語った」と。

これがどういうことを示唆しているかは明確だ。しかしそれははたして正しいのだろうか？つまり、こういうことだ。学生を曹洞禅の修行へと導くことにおいては、曹洞禅の指導者の活動そのものよりも大学でのアジア宗教についての授業のほうがずっと貢献しているということだ。このことは大学で教育にたずさわっている者にとっても、禅の指導者にとっても、ある意味で奇妙な意味合いをもっている。われわれのような大学に職をもつ者は、意図的に相手を改宗させるような活動を教室ではしないように努力している（他の教職員がわたしと同じように厳格にそれを遵守しているかどうかは定かではない）ときでさえ、学生の人生に思ったよりもはるかに大きな影響を与えているかもしれないのである。しかし、こういう推論はもしかしたら的はずれかもしれない。教員の数に比べれば、学生たちに行き渡るほど充分な数の禅指導者がいるとは言えない（まだいまのところ）からである。

最近、わたしは学生たちと大学院のセミナーで『Religion on Campus（大学のキャンパスにおける宗教）』という本を読んだ。それはアメリカの四つの異なるカレッジやユニヴァーシティにおける宗教的な活動がどのようにおこなわれているかを民族誌的（ethnographic）な観点から詳細に描いた本である。わたしは、キャンパス内でキリスト教徒の学生を導いていくことに関わる人達がじつにさまざまなやり方をもちいて、またさまざまなレベルで学生たちに手をのばし彼らを惹きつけようとしているかを知りたいへん感銘をうけた。各宗教グループは学生たちのために礼拝の機会をつくるだけではなく、情緒的な問題を持つ学生の支援をしたり、仲間同士のきづなを深めたり、友人関係を育てるといったサービスもおな

じく提供しているのだ。(そう、快適にデートができるような環境もつくろうとしている) こうしたサービスを提供するために、さまざまな伝統的教派や新興の伝道運動体はキャンパスでの宣教活動に対してかなりの人材と制度的援助つまり相当額の資金とその仕事に一生を賭けるような献身的な働き手のこと一を投入している。この本ではどのくらいの数の学生が卒業後も当の宗教グループの活動的な参加者として残っていくかということについて追跡して調べようとはしていない。しかし、インタビューをうけた学生の多くは将来にわたってグループとのなんらかのつながりを継続していくだろうと話している。

この本の共著者達はキャンパスにおけるアジア宗教の活動についてはまったく関心をもっていないようにみえる。すくなくとも彼らはそういうグループの存在をまったく見いださなかったのである。この本にとりあげられた四つの大学のうち一校だけは近所に禅センターがあった。しかし著者達は学生がそのセンターに関わっているかどうかを調べるためにそこを訪れることはしていない。曹洞禅や他のアジアの宗教グループは、アメリカの大学のキャンパスにおいて本質的に無視してさしつかえないほどなんの役割も果たしていないということがあり得るだろうか？

われわれはこういう仮説をもっている。人と人と結びつきの機会を提供するような禅グループはそうでない禅グループよりも十代、二十代の若者を惹きつけるだろう。つまり、ただ一緒に坐禅をしたり道元の教えを学習するためだけに集まり、持ち寄りの夕食会や外での社会奉仕、禅に関係する映画を鑑賞する夜会といったグループでの活動をおこなわない禅グループは比較的少数の若者しか惹きつけないだろう。一方、学生たちの生活のニーズをうまく満たすような禅グループは多くの学生が加わってくるだろう。(ホームー・シン普森なら「ドォー！(あたりまえさ!)」と言うことだろう) 或る禅センターを訪れたとき、学生たちがそこを出たり入ったりすることをごく自然なこととして認める雰囲気があるように思えた。実際、そこにいた数人の学生は大学を卒業してのち大学院か医学校に入るまでの期間を利用して、数ヶ月に渡る安居修行をしているさいちゅうであった(わたしはそれを「禅をおこなう学期」とよぶ) こういうことは他所でも起こるだろうか？

キャンパスにおける坐禅グループのほかに、アメリカ各地の曹洞禅指導者たちは「刑務所におけるダルマ (prison Dharma)」つまり受刑者に坐禅を教える仕事にも深く関わっている。こうした活動をするに対しては正当な人道主義的

な理由がある。だから、そういう活動のために禅センターやグループが費やす労力を考慮しても、それをうわまわるほどのやる値打ちがあることだとされているのかもしれない。しかし、刑務所にいる限られた数の人々に坐禅を教えるために多大の時間を割くことが、もっと多数の人々へと手を差しのべるために使うべき小規模禅センターの力を過大にそぐ結果になってはいないだろうか？わたしはそう考えざるを得ないのだが..

上記のいくつかの問いへの解答、コメント、応答があれば、是非下記のメールアドレスへ送って欲しい。jmcrae@indiana.edu 件名のところには「学校における禅」と記していただきたい。読者のみなさんからの便りを楽しみにしている。



私の『坐禅参究帖』(九)

藤田一照

パイオニア・ヴァレー禅堂

《断想 18》 全一の坐禅 (1) 坐相の全一性 その二

(承前) また、坐禅の姿勢を修正・矯正するにあたっては、坐相の一部をいじることの影響が、そこだけにとどまらず、先述の「連動の法則」によって、必然的に全身に及んでしまうことも常に念頭においておかなければならない。一部分の改善が他所の改悪につながる可能性もあるのだ。さらに姿勢の歪みの焦点・根本原因になっているところ(姿勢の急所である腰と頸がそうであることが多い)が正されない限りは、局所的修正は一時的なものにとどまらざるをえない。だから坐相の矯正においては、目立つ部分の歪みにのみ注目する局

所的、対症療法的なやりかたではなく、姿勢全体を見据えたホーリスティックで根本治療的なアプローチが要求されるのだ。

全一なる姿勢としての坐相をきわめていくためには、体のどこをどう動かせば、どこにどう影響するかといった具体的な坐相の「同時相関・連動の法則」や姿勢を矯正するうえでの「急所」「ツボ」といった「からだの文法」とでもいうべき知恵を、日頃の坐禅実践のなかで体得していく必要があるのではなかろうか。

坐禅をならい始めたばかりの頃は、体の個々の部分に対する個別的な指示に心をとられ、体の各部分がバラバラの混沌状態になったように感じられ、みずからの坐相を一つのまとまりとして体感することはなかなか難しい。それは、あたかも、体の各部分がいずれも身勝手な自己主張をして、しかもそれぞれが居心地の悪さに文句を言って、「おさまりがつかない」といった状態だ。しかし、いろいろ苦勞しながらも身心を坐禅に親しませていくと、時とともに「からだの文法」がわかるようになり坐相がこなれてくる。そうなってくると、坐禅のなかで「統一感」「一如感」が自然に感じられるようになり、それが次第に深まっていくものである。それは、体の各部分の間で折り合いがついて、それらがみんな「坐相」という一つの全体のなかに静かに帰入して、「おさまるところへおさまった」という状態だ。

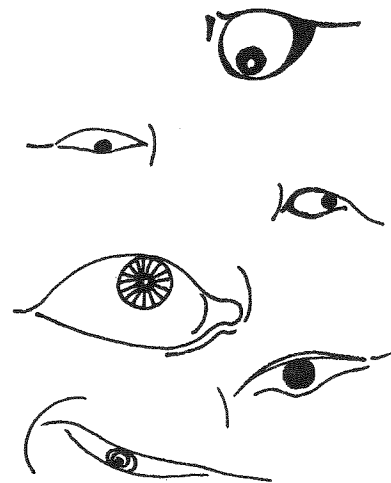
この「おさまった」感じを、さっきは「体の各部分が全身の筋合いのなかに包摂されている」と表現したのだった。それをもっと具体的な感覚として言えば、全身の重さが下腹部の中心あたり、古来「臍下丹田」と呼ばれてきたところに自然に落ちており、同時にそこに体感される充実感（力）が体の各部に波及・浸透して、そこが中心となって全身が一つのまとまりとして統一されている感じということになるだろうか。

こういった、体の中身の状態に関する感覚は、主として触覚、特に「内触覚」ともいえる体性深部感覚（筋・腱・関節による感覚）や内臓感覚を通して感得される。筋肉と骨組みで正身端坐をねらう坐禅においては、自分のからだのなかみの状態（快・不快、重力との関係、筋肉の緊張状態、体の形など）に関する情報を得る、「内界受容器」が鋭敏に働いていることが、きわめて重要なことになってくる。（これに対して、いわゆる五感とよばれる「視・聴・嗅・味・触」覚は主に外界の情報を受け入れる働きをしている。我々は普段、これらの「外界受容器」偏重の生活をしているといってもいいだろう。坐禅に関して「回向返照の退歩を学す」と言われるが、

それはある意味では、「外界受容器優位」のありかたから、「内界受容器優位」のありかたへのシフトを指すのだといえるかもしれない。）

坐禅において感じられる「統一感」「一如感」は、固定的なものではなく、その時その時の坐相の精度、内界受容器の感度などによって絶えず微妙に変化し、ゆらいでいる。それは当人の坐禅の「全一度」に相応して、体全体で漠然と感得される流動的な感覚である。痛みなどのように強烈ではっきりした局在性のある感覚とはちがひ、それはあいまいで不明瞭で拡散的であるから、とてもとらえがたい感覚なのである。

こうした「一如感」に対する感受性を養い、より繊細・鮮明にしていくことは、身相がどれほどとのっているかを、深いレベルでみずから知る力を磨くことにつながる。坐相の全一性という問題を考えるにあたっては、「美しい姿勢で坐っているなあ」といった外から見て取れる外観的な形もさることながら、こうした感受性によって内観される体のなかみの質も、決して見落としてはならぬ大事なことなのである。



北アメリカ開教総監部・開教センターニュース

◎2001年10月27日・28日の両日カリフォルニア州モンテペロ市の曹禅寺にて晋山式が厳修され、倉井秀一師が開教主任として晋山された。首座は、長野県本地院徒弟シール光宗師が勤められた。

◎2002年2月9日・10日の両日ロサンゼルス市Miyako Innホテルにて曹洞禅連絡会議が開催された。話し合われた内容は以下の通り：

- ・高祖道元禅師750回大遠忌大本山永平寺参拝について
- ・勤行聖典英訳出版について
- ・伝道教師、伝道師、海外僧侶の定義について
- ・海外開教に関する宗制一部変更に伴う、質疑応答
- ・その他

◎3月9日から15日まで、サンフランシスコ禅センターにて北アメリカ開教センター所長奥村正博師による眼蔵会が開催された。奥村所長は「正法眼蔵山水経巻」を提唱され、約70名が参禅聴講された。

◎4月1日付けで、サンフランシスコ桑港寺の南原一貴師が北アメリカ開教センターの常勤書記となり、桑港寺の後任にはオークランド市好人庵禅堂の館寺規弘師が転任した。



北アメリカ開教センター活動予定

2002年4月～10月

宗典講読会

会場： 桑港寺

1691 Laguna Street San Francisco, CA 94115

講師： 奥村正博 北アメリカ開教センター所長

内容： 正法眼蔵仏性巻

日時： 2001年5月5日、6月9日、7月14日（午後2時より提唱のみ）、8月4日、9月8日、10月20日の各日曜日

午前	8時 00分	坐禅
	8時 40分	朝課
	9時 00分	作務
	9時 30分	提唱

高祖道元禅師750回大遠忌記念大本山永平寺参拝

9月13日から18日まで、高祖道元禅師750回大遠忌に因み大本山永平寺に報恩参拝し、両祖様の祖跡を拝登する。

